

「終わりにする、一人と一人が丘」

西尾佳織

## 登場人物

女1……マッチングアプリで男1と出会い、海辺の温泉街へ旅行に来た。

女2……自分が二十七歳だと思っている老婆。男1の母親。

女3……女1の未来。男2の母親。

男1……マッチングアプリで女1と出会い、海辺の温泉街へ旅行に来た。

男2……女3の息子。

男3……男2がかつて死体運びのバイトをしていたときの同僚。介護施設でも働いている。

## 時

一九七八年、二〇一七年、二〇一八年、二〇五四年。

## 場

人々の記憶の中、様々な場面が浮かんで消えていく。

時間は過去から未来に進む一本線ではなく、過去も現在も未来も、全部となり合って降り積もっている。

第一部

1

フードコート

二〇十七年の秋頃。

女1が一人で座っている。

そこに、彼女の恋人（Ⅱ男3が演じる）とその息子（Ⅱ男2）が来る。

女1、恋人に気付く。彼とその息子の様子を、楽しそうに眺める。少

しして、女1の友人（Ⅱ女3）が来る。

女3 あ、いたいた。

女1 あ。

女3 混んでるねー。すごい人多い。

女1 ごめん、席分りにくかった？

女3 ううん、大丈夫。それ何？

女1 うどんと、とり天。

女3 はなまるうどん。

女1 うん。それは？

女3 なんかつちにあつた韓国料理屋の、ピビンパ。

女1 へー美味しそう。

女3 食べよ食べよ。

女1 うん。いただきます。

女1 ね、あそこにさ、緑のセーター着た男の人いるでしょ。

女3 あーうん。いる。

女1 あれね、彼なんだけど。

女3 え？

女3、もう一度見て確認する。

女1も、熱心に見ている。

女3 えー大丈夫？ なんか、場所移動する？

女1 なんで？ 大丈夫だよ。

女3 ……そう。

女1 息子、初めて見た。かわいいなー。

女3 （気まずそうにチラッと見て）そう？ 生意気そうじゃない？

女1 うん。でもそれがいい気がする。やー、なんかすごい、お父さん

なんだなーと思って。なんだろう。……ちよつと感動。

女3 まあ、事実そうだからね。

女1 うん、そうなんだけど。子供さ、たぶんマツクのセット食べてる

んだけど、彼が食べてるあれは何かなー。

女3 ……。

女1 フードコートっていいよね、子供が親と違うもの食べられて。

女3 そんなに見ない方がいいんじゃない？

女1 え、なんで？

女3 なんで？

女1 まあ、言ってる意味も分かるけど。

女3 やっぱ席、移動しよっか。

女1 えーいいよ。あ。

女3 何？

女1 あれ、奥さんかな？

女3 え？

女1の恋人の妻（Ⅱ女2）が輪に加わっている。

女3、振り返って確認し、堂々と見ている女1に

女3 やめなよ！ 気付かれたらどうするの？

女1 んー気付かれたら、やっぱまずいのかな。

女3 ええ？

女1 でも、私がフードコートに来てるのは普通のことじゃない？

女3 ……。

女1 普通に挨拶する、とか今ちよつと思っちゃった。

女3 え、大丈夫？

女1 大丈夫だよ。

女3 そうじゃなくて、この状況で普通にしてられるっていうのがけつこう普通じゃないと思うけど。

女1 うーん、たぶん言ってる意味も分かっているとと思うんだけど、私は大丈夫。

女3 や、だから、この状況で大丈夫なのが心配なんだって。

女1 そっか。

女3 うん。

女1 じゃあ……どうしょっか。

女3 はあ！？

女1 私は大丈夫、なんだけど、大丈夫なのが心配？なんだよね？

女3 ……。

女1 困ったね。……て、ごめん、あんま困ってないけど。…何がごめんかも、分かんないけど。

女3 ……。

女1 ……。

女1 はまた遠くの恋人一家を見てしまう。

女3 ちよつと。

女1 あ、ごめん。……「ごめん」？ え、なんか、怒ってる？

女3 怒ってない。

女1 怒ってる感じがするけど。

女3 怒ってない。ただ心配してる。

女1 ……そうなんだ。

女3 ……。

女1 困ったね。て、あ、今度のは私はけつこうほんとに困ってるんだけど。

女3 なんかさあ、

女1 うん。

女3 なんでそんなに他人事なの？

女1 んん？

女3 ……。

女1 あ、ごめん、よく分からなかった。他人事って、どういうこと？

女3 子供欲しいの？

女1 欲しくないよ？

女3 え？

女1 ？

女3 ……そうなんだ。

女1 うん。

女3 ……でもあなただってもう三十(?) なんだからさあ。

女1 あー、うん(?)

女3 まあそういうこと。

女1 ……え？

女3 ん？

女1 あ、ごめんあの、他人事ってどういうこと？

女3 え？

女1 さつき言ったよね、「なんでそんなに他人事なの？」って。

女3 言ったよ。

女1 それを聞いたんだけど。

女3 (はあ…)

女1 どの事柄について私が、あ、私だよ？ 私が他人事なのか、分  
からなくて。

女3 あなたが、妻子のある人と関係を持つてることについて、それを  
選択してる自分の人生について、他人事だってこと。

女1 いや、他人事じゃないよ？

女3 え？

女1 私は全然、他人事じゃないよ。

女3 ……あなたが心配だよ。

女1 うん、さつきから、心配って思ってくれてるらしいことはほんと  
に伝わってるんだけど、たぶんこれ言ったらあなたを傷付けるかも  
しれないけど、私を感じてるのはね、

女3 うん、何？

女1 あなたが他人事だよ？

女3 は？

女1 というか、うーんなんて言ったらいいんだろう。私は、あなたは  
この事柄について他人だと思うんだけど、なんでそんなに入ってく  
るんだろうなって、思ってる。

女3 ……。

女1 私が悪いわけじゃないと思うんだけど、ただ今日、たまたま一緒  
にフードコートに来たらこういうことになっちゃって、だから今日  
は一旦帰った方がいいのかなって思ってます。

女3 ……。

女1 私はうどんととり天、食べてから帰るね。

恋人の家族たちが笑いながら去っていく。

女1、恋人に声をかける。

女1 ねえ。

恋人が振り返る。

女1 こないださ、フードコートにいたよね？ そう、私もいたの。息  
子、小4だっけ？ かわいかったー。あなたもね、なんかすごい、  
お父さんなんだなあって感動しちゃった。こんな顔、するんだなあ  
って。人の、初めて見る面に触れるって、感動するね。それが好き  
な人だったら尚更そうだと思うんだけど。

でも私、そのとき友達と一緒にいたんだけど、その友達がなんか  
怒っちゃって。まあ本人は怒ってないって言ってたけど私は、怒っ  
てる、怒られてるように感じて、だけど全然わかんなかった、その  
子が怒ってる理由が！ そんなことってある！？ 分かんなかった  
んだよ！ だってその子は、私に、怒ってたのに！

(人のところが分からない。分からないことが私にはデフォルトだ  
けど、友達は、友達なのに、当然分かるだろうという分かり合えな  
さで私に対して親身で、これはものすごいアウエーの風。)

だけどそういうことってあるよねっていうか、もしかしたらそんな  
なことばかりなのかもしれないなって、私うどんととり天食べな  
がら、あなたと息子と奥さんのこと見ながらふと、思ったんだよ。  
人と人が別々の生きものだってこと、例えばこのうどんととり天  
だって小麦とか、鶏とか元々私とは別の生きもので、その体を食べ  
るって形で私はその生きものたちと関わり合ってる、その異なり、

私たちは一体なんと別々でまったく違った生きものだろう！ わななくね！ ていうようなこと、そのアウエーの風が、一瞬一瞬「わたし」を活かして、存在を粒立たせるということ、もしかしたらあなたにも伝わらないかもしれないと思ったの。

以下、恋人の台詞は文字で映される。

恋人 もっとまっすぐ言葉にしてくれないかな。

女1 え？

恋人 うちの家族とかち合っちゃったとかそういうことは、確かにこっちが申し訳なかった……んだと思う。悪かったよ。

女1 え、全然悪くないよ。あれ？ わたしの話、聞いてた？

恋人 聞いてたよ。そういうところ、正直怖いなって思うよ。

女1 え、どうしよう。私も今、すごい怖い。何これホラー？ 私の言葉って、自分にだけ違って聞こえてるのかな？

恋人 家族を捨てるつもりはないよ、悪いけど。

女1 だから全然悪くないよ。ていうか私もそんなこと、望んでないよ。

恋人 ……。

男3、去る。

女1 そういえば私たちって、一緒にフードコート行ったことなかったね。

女1 そのことと、私があなただの「お父さん」してる顔見たことなかったことは、関係あるのかな？

女1 あ、今なんか誤解の気配を感じたから先回りして言うと、別にこれは、「一緒に行きたかったのに」の婉曲な表現とかじゃないよ。

女1 おーい！ なにか喋ってくれーい！

女1 どうしよう、言葉が怖くて喋れなくなりそう。

女1 でも私、フードコートって大好きなんだ。

女1 だからまあこれからも、私は私でフードコート、行くね。

女1、食べ終わったトレーを持って去る。その様子を女3は見ている。

**昨日のわたしと今日のわたし**

女3 という三十七年前の記憶が、今朝ふと私を通っていった。

二〇五四年。

女3 ん

口内に違和感を感じて、何か吐き出すと、歯の詰め物。それを眺める。

女3 二十九歳のわたしと六十六歳のわたしは、同じ私か？

男2、来る。

男2 おはよう。

女3 ん……？ ああ、おはよう。

男2 何、ぼんやりして。

女3 取れた。

男2 え？

女3 歯の詰め物がね、うどん食べてたら取れちゃった。(見せる)

男2 やめてよ！ え、うどん？

女3 うん、夢で。

男2 ……おれ今夜バイトだから、ご飯いらないけどオニギリ欲しい。

女3 ……分かった。

男1が遠くを通り過ぎて、女3はそれを目で追う。

男2 ちょっと母さん大丈夫？

女3 何が？

男2 いや知らないけど。歯医者、行けば？

女3 そうだね。

男2 行つてきまーす。

男2、去る。女3、無言で手を振り、それからまた詰め物を眺める。

男1が近くにいる。

女3 ……引き返せないという意味でなら、もっと早いいつのタイミン

グでも変わらなかったと思うのに、今日、記憶は私を訪れた。

男1、去る。

女3 記憶が私を訪れる。私は、記憶に、訪れられる。私は〈場所〉で、そこを記憶が通過する。

文字 第一部 二〇一八年

2

**大きい風呂**

その続きの、別の記憶。

人々が来る。人々に紛れて女1も来る。みな、服を脱ぐ仕草だけして、それで「脱いだ」ことになるが、男1だけは本当に全部服を脱ぐ。かけ湯をして、つま先からお湯に浸かり、ゆっくり全身を浸す。その記憶に女3も浸る。

女1 大きいお風呂に、色んな体の人がいる。

女2 「お母さん見て！」

女1 と言った男の子が手ぬぐいを湯船に浸けて振り回して、顔はお母さんと普通におしゃべりしながら、おちんちんの先からチャーツと、透明な水みたいなおしっこがチャーツと出てきて、びっくりした。

しばらく、その子がお母さんと一緒に露天風呂に行ってしまうまで、見ている。

女1 いつまでおねしょ、してたっけ。

女3 おねしょしてた頃、目が覚めて確かめて、それを祖母に言うのが恥ずかしくて仕方なかった。とつてもばつが悪かった。でも今は、

きつとしようと思っても出来ない。

女1 昔は夢見ると、その世界をすぐ信じてた。でも今は、もうあんな風に騙されることが出来ない。

男2 「最終的解決」

女1 という言葉が耳に飛び込んできてギョツとして、

女1、また別の方向の、女の子二人の会話を聞く。

男2 だからその子は、でも最終的に一緒にいるのが私ならまあいいの、とか言ってるさ」

男3 「えーそれ絶対だめなやつ」

男2 「でしょ。だって絶対別れる気ないじゃん」

男3 「うん、ない」

男2 「でも言っても聞かないんだって」

男3 「あ〜〜」

女1 と女の子たちが、その場にはいない誰かのことを話してる。

女3 「最終的に一緒にいるのが私なら」の「最終的」っていつだろう。

死ぬときだろうか。

女1 それはたぶん、どこかに定まってあるものじゃなくて、決めないといけない、人間が。

女3 始まりは楽しい。楽しいからみんな始めるのは大好きで、でも終わりにするのは難しい。

女1 「はい！ じゃ、終わりで！ 解散！」

女3 と言って終わりになるならラクだけど、終わりたいのは一方だけで、他方はまだ本当は続けたいと願っている。その声に耳を傾けず

に切って捨てて放り出せば、たたり神になる。友達が何人かそうな<sup>5</sup>った。今も穴の底にいる。

女1 みんな「最終的に報われる」と思って今を耐え忍んで、でも待つていた「最終」は来なかった。その手前で終わりになった。耐えた分だけ掛け金が増えて、重たくなって沈んだ。

女1、いつの間にか風呂から上がって脱衣所にいる。

女2 「ニジュウニ、テン、ジュツキロ」

女1 と子どもが、体重計の表示を読んで、それ、たぶんニジュウニ、テン、イチゼロだよ、と思っておかしくて、思わず笑っちゃいました。

男1 え？

まだ風呂に入っていた男1、女1からいきなり当然のように話しかけられて、びっくりする。

男1 ……あ、え？ あ、、、え！？ え！！？ あ、へえ。

慌てて服をまとう男1をよそに、女1||3は平然と話し続ける。いつの間にか、二人(三人)はお風呂屋さんの外を歩いている。以下、男1は女1と女3を同一人物として、常にどちらか一方だけを認識する。

### 商店街

女3 だから女の子が、小数点の「テン、イチゼロ」を「テン、ジュツキロ」って読んで、

男1 ああ……まだ習ってないってことなんですかね。

女3 そうそう！ や、だからその、おしっこしてた男の子にしても、すごいなー！ と思って。

男1 ああ。それ、だいぶすごいですね。

女3 はい。だって、バラバラなわけでしょう、頭と下半身が。そんなこと出来ます？

男1 や、無理ですね…。

女3 こっちはもう、統制されちゃってるわけじゃないですか身体が、頭に。でもああいう風にも、あれたんだなあ、と思って。

女2、男2、男3、商店街を歩き交う人々になる。

男1 ……おお。

女3 あれ、面白くないですか？

男1 や、正直、あなたが何に惹かれてその話をしてるのか分からず聞いていたもんで、

女3 あ。すいません。

男1 でもあれですかね、何かこう、憧れみたいなものがあるってことですか？

女3 憧れ？

男1 憧れっていうのも違うのか、でもなんだろう、子どものそういう感じに、いいなあと思うっていうことなんですかね。

女3 あー……。

女1 このとき、わたしは生物学的(?)な話をしたかったんだけど、でもなんか母性愛みたいな話題になった。

女3 憧れる感じは、でもありますね。

男1 ン？ 子ども？

女3 (子ども)を、持ちたいってことじゃなくて、子ども自体に。

男1 えー全然わかんないな。

女3 そうですか？ ちなみに普段、立ちシヨンとかされます？

男1 え？！

女3 けっこう理解不能なんですよね。

男1 えつと……立ちシヨン、が？

女3 だって外じゃないですか。しかも一部出てますよね。

男1 それはまあ、そうですね。

女3 なんでオッケーなんですかね。

男1 いや、オッケーかどうかは……。

女3 今、竜馬の漫画読んでるんですけど。

男1 はあ……

女3 あ、つて、ごめんなさい、大丈夫ですか？

男1 ……話についていけないか、分かんないですけど。

女3 それは全然大丈夫です。分からなくても、大丈夫です。

男1 はい。

女3 で、話を戻すと、この前読んだ巻でくすぶってた時期の竜馬が高杉晋作と意気投合して、遊郭の屋根から二人して盛大に立ちシヨンするってシーンがあったんですよ。

男1 あーはい。なんか、ありそうな。

女3 ですよね。私もすごい、いいなーと思いました。竜馬と晋作っぽいし、豪放な感じがするし。

男1 はい。

女3 で、でもふと、じゃあここでわたしが、竜馬と晋作と並んで笑いながら立ちシヨンしたらどうだろう？ と思って。

男1 ……え？

女3 つてなりませんよね。だってわたしのおしっこは、二人のように飛んでいかない。それにわたしの顔は、二人のように笑えない。と思つて。

男1 ……あー。

女1 という話は、でもさすがに彼が引いている様子がありありと感じられたので、言わずにおいた。

女2、男2・3 ふーん

女3 え

商店街の人々が、いきなり話にのつてきた。

### ストリップショー

女3 先週初めてストリップショーを見に行った。

例えば銭湯に行ったつて、こんなにしっとりまじまじ女性器を見ることがなんてない。自分のだつて、工夫すれば見られるだろうけど特別そんな、見ない。でもその日はすごく見た。五人分三時間以上見た。やーもう、たった五人でもなんと様々なのか！

女2 私はすっかり面食らってしまった。色も形状も、

男2 違い過ぎてわななき、そしてしかし五つ全てに思ったことは、

女3 思つたより外に出てる！

女2 ということで、それが一番の、

女3 ショック。

男3 「ボノボ」という単語が通り過ぎた。

女3 そう。私は女性器つて「体内」だと思つていた。

男2 ピエロのような衣裳とメイクの女の人が、パントマイム的な気配<sup>7</sup>

の動きで箱を運んで来ては中からおもちっぽい小道具を取り出し、道化めいたリアクションをし、そしてなんか、脱いでいく。

男3 「なんか」？

男2 うん。「なんか」つて何だという感じだが、「なんか」としか言えないのだ。だってパフォーマンズの流れから脱ぎに、必然性ないんだもの。箱を置く。しりもちをつく。で、なんか、パンツ脱ぐ。箱を開ける。ラッパが出てきて喜んで吹く。で、なんか、ブラ外す。

女2 私たちはリズムに合わせて手拍子し、タンバリンがかき鳴らされリボンが舞う。エロさは全然感じない。どちらかというところポーテイー。

女3 あと、筋肉。

女2 最前列のお客さんの顔から三十cmくらいの位置に肉体があつて、時々そこに女性器もパツと現れて、みんなものすごく直視している。まっすぐ真剣に、

女3 でもこれは、何を見ているんだろう？

女1 勝負のよう。分からなくなってきました。

女3 全員服を着ている中に一人だけ裸の人が同じ空間にいて、それつてもすればものすごく怖い状況であり得るはずが、いま主導権を握っているのは

女2・3 彼女。

男3 ハリのある肉体を駆使して空間を制し、

男2 でもその中心で一番のテンションを担っていると思しき女性器は、

女2 見えてしまうと大して素敵じゃないっていうか

女3 むしろヘンっていうか私は

全員 「人体の不思議展」

女3 的な気持ち。

女2 ヘンだなあ色とか。形も。

女3 あれ？ ところで手の甲とあそこって何が違うんだっけ？

女2、男2・3 え？

女3 いや違うけど、でも私が普段例えば手の甲の皮膚を平気で人前にさらしながらまんこを隠しているというのは、一体どういうこと？

**商店街・つづき**

男1 あ、カキだ。

女2・3、男2・3 え？

男1 ほら。

女1 あ、ほんとだ。

女1、カキを見に行く。女2、男2・3はまた道行く人にばらけられて、女3だけ残される。女3、かつての自分と男1を眺める。

女1 え、ひと盛り千円って！ 生のホタルイカも売ってる。

男1 好きなんですか？

女1 はい。すごい、安い。

男1 へえ、そうなんだ。

女1 東京だったら全然こんな値段じゃ買えないと思います。

男1 ホタルイカなんて買ったことないや。

女1 うわー自家製オイルサーディンだっけ。

男1 買います？

女1 でも、宿にご飯付いてますよね？

男1 まあでも、せっかくだし。いいんじゃない。

女1 そっか。じゃあ買おっかな。

男1 うん。どれがいいですか？ オイルサーディン？

女1 ん〜〜や、サーディンも惹かれるけど…イカにします。

男1 はい。（お店の人に）すいませーん。

男1、道行く人に声をかけるが、誰も止まらない。それでもめげずに呼び止めようとし続けるので、女1が見かねてスルツとお店の人になっってしまう。

女1 三〇〇円になります。

男1 え・・・あ、はい。これをお願いします。

女1 これ、おまけ。（と言って小さなおやつを渡す）

男1 あ、ありがとうございます。

男1 はい。

とごく自然に男1がホタルイカを差し出して、女3が受け取る。

女3 ありがとうございます。すいません。

男1 いえいえ。お刺身で食べるんですか？

女3 や、ホタルイカはねえ、寄生虫がいるから生食ダメなんですよ。

男1 え、じゃあどうするんですか？

女3 ……どうしよう。（お店の人に）あ、すいませーん！ これ、こちらで茹でていただけたりしませんかね？ 今日これから旅館に行くもので。

女1 あーそんな言うたら茹がいてくれるわ。

女3 あ、そうですか。じゃあお願いしてみます。

女1 はい、ありがと。

女3 ありがとうございます。(男に)旅館で頼めばいいって。

男1 ……うん。

女3 (イカの袋を示して)なんかすいません。

男1 いやいや。三〇〇円だし。

女3 でもあの、食事の支払いの欄が「相談」ってなってるから。

男1 え、そんなのありましたっけ?

女3 はい。大体の人は「二回目のデートは男性が払う」ってなってるけど、「相談」ってなってる。

男1 えー? あれ、そうだったっけ? それたぶん分からずやってました。

カッコ悪…。

女3 そうですね?むしろ、いいなあと思いましたけど。お金を出してもらうのってなんかキュウクツで。

男1 ふーん。

女3 ていうか、まずそんな欄あるんだ!と思いますよね。

男1 うーん、僕は認識していなかったんで…。

女3 そっかあ、間違いか。わたしはそこもけっこうポイント高かったんだけど。

男1 えーそこ?

女3 はい。

男1 ……あ、これもらったんで。食べます?(と言って、さっきもらった

たおやつを半分渡す)

女3 ありがとうございます。

二人、おやつを並んで食べる。

男1 料理とかけっこうされるんですか?

女3 や、しませんね。

男1 そうなんだ。すごいキツパリ。

女3 はい。

男1 わざわざホテルイカなんて買ってくるから。

女3 ああそれは、懐かしくてつい。地元でよく食べてたんです。

男1 そうなんですな。

女3 ……あの、よかったら敬語やめませんか?

男1 え

女3 もう、三回? 会ってるわけだし、こうやって旅行にも来てるわけだし。

男1 あ、はい。そうですね。

女3、目を見開く。

男1 ……そうだね。

女3、笑顔になる。

女1 二人はそのまま歩いて、

男1 あ!

女3 何?

男1 ソフトクリーム。食べます?

女3 え、また食べるの?

男1 え?

女3 甘いもの、食べ過ぎじゃない?

男1 そっか…ごめんなさい。

女3 いいけど。ご飯食べられなくなるよ。

男1 そうですね。

女3 また敬語に戻ってる。

男1 あ。

### 旅館

女1 でも男の歩みの方が早くて徐々に距離が離れて、男は一人で旅館の部屋にいる状態になる。

男1、一人になってふうーっと息を吐き、畳に大の字になって顔を覆う。携帯を取り出し、眺め始める。

女3、立ち止まり、男を含む空間を眺める。それは、実際には彼女が見なかったはずの男の姿。

男2 という女の言葉が、二人の現実になる。

女3、え?と違って男2を見る。

### ベランダ

女2がいつの間にかベランダに来ていて、景色を眺めながら歌っている。

悠々と歌う女2を、女3は見上げる。

やがて女には曲を歌い終えて去り、女3も去る。

## 第二部

3

### 報われる

文字 第二部 二〇五四年。

男2 終わりには、幅がある。

昔少しだけ付き合った人がいて、別れてからもしばらく、半年か一年に一度くらい電話があった。何を話すわけじゃないけど大体夜で、三十分くらい、話して切れる。僕も電話してる間だけ彼女のことを思い出して、切れば忘れた。

男2 そうやって思い出さないまましばらく経って、あれ、そういえばずいぶん電話来てないなど思って、気が付いた。いつの間にかほんとにちゃんと、終わった。

男2 きっと、終わったことに気付きもせずに終わってることがたくさん、あるんだろう。

男3が入ってくる。転がっている男1の体(＝死体)に気付く。腕を持ち上げたりして軽く点検する。

男2 五年前。僕は死体運びのバイトをして、毎日たくさんの人「終わり」を見てた。

男3 おい、運ぼう。

男2 この彼にも仕事にも、僕はあるまじめなくて、

男3 何してんの、早く。

男2 だけど彼から聞く「おばあちゃん」の話は好きだった。

男2、記憶に入る。

二〇四九年。

男3 遅いよ。

男2 すいません。え、これ、なんでこんなところに？

男3 分かんないけど、だいぶ昔に亡くなったんじゃない。腕のどこ、ミイラになってる。

男2 え！？ ……ほんとだ。

男3 一人で死んだのかもね。（と言いつつ、ミイラ化してカサカサになった皮膚の部分に触っている）

男2 なんですか？

男3 ミイラって、脱水症状起こして餓死するようになるらしいよ。

男2 ……へえ。

男3 怖い？

男2 いや、怖いつていうか…可哀相だなんて。だって一人で死ぬって、寂しくないですか？

男3 寂しいも何もないでしょ。死んでるんだから。

男2 そうか。

男3 運ば。

男2 はい。

二人、声を掛け合って男1の体を持ち上げ、運ぶ。

男3 この皮膚の感じ、おばあちゃんと似てる。

男2 あー介護の方の？

男3 うん。

男2 かけもち、キツくないですか？ よく続きますね。

男3 あっち行って、またこっち来るのがいいのかも。

男2 え？

男3 一ヶ所にいると、固まっちゃうから。

男2 はあ。

男3 それに、死んでる人とおばあちゃんって似てんだよ。

男2 え、どこが？

男3 会話しなくていいところ。

男2 ……。

男3 まあおばあちゃんって呼ぶと、怒られるけど。

男2 ……なんて呼んでるんですか？

男3 ウェービー富美子。

男2 え？ ウェービー？

男3 富美子。

男2 なんすかそれ（笑）

男3 そう呼ばれてたんだって、恋人に。右の眉毛のここらへんに一本だけ縮れたのが混じって、それが可愛かったからって。

男2 富美子は？

男3 感じかな。

男2 テキトーだなー。

男3 でも実際見たら、富美子感あったよ。

男2 えー

男3 だけ去る。

男2 そのおばあちゃん、ウェービーは、自分が二七歳だと思つてた、らしい。

男3、すぐ女2を台車に載せて戻ってくる。

**老婆**

二〇四六年。

男3 その歌、いつも歌ってますね。好きなんですか？

女2 好きじゃないよこんな歌。

男3 そうなんですな。

女2 私だって、早くここから離れたい。

男2 ここ？

男3 ……二七歳のとき、一緒に暮らしてた恋人が出て行って、そっから延々ずっとその日なの。

男2 ええ？？

女2 その日は朝から晴れててね、すごく気持ちがよかったの。溜まっていた洗濯物干して、一緒に公園行こうかな、ねえ？ ピクニックシートとあったかい飲み物持って……って窓際の彼に話しかけようとして、気が付いた。ベランダの向こうが、海だった。

男3 海？

女2 そう！ 昨日まで大雨だったから、街中洪水みたいになってるの。表面にポチポチ家や車が浮かんで、見えちゃいけないものが露出

してる！と思つて、ドキドキした。

女2、流れていくものを眺める。

女2 (手を振る) あ、三好くん。

男2 ミヨシくん？

男3 小学校のとき、隣の席で。いつも服があんまり洗ってない感じで、臭かったんだって。

男2 へー。

男3 あ、金魚。

男2 え、どこ？

女2 あーあれねえ、クラスで飼ってたやつだ。

男3 そうなんですな。

女2 うん。水槽の水替えるとき、まちがって流しに流しちゃって。次の日学級会で問題になったんだけど私、言えなくて。

男3 分かります。そういうことって、ありますよね。

女2 でもすごい、大きいフナになってたねえ。よかったー。

男3 よかったですね。

女2 あーあとあれ、何だっけ？ ほらあの、大きい街

男3 ニューヨーク？

女2 そうそれ。なんかこういう女の人(自由の女神)も流れてる。

男3 ほんとだ。

女2 なんにでも終わりは来るね……長い間、ご苦労様でした。(ペコリ)

男3 (ペコリ)

男2 ……よくついていきますね。

男3 もう何百回と聞いてるから。  
男2 にしてもすごいと思いますよ。

女2 そうやってオカシイ女に、話を合わせてるんだ。

男3 え？

女2 そういうの、体に悪いからやめた方がいいよ。

男3 え、急にどうしたんですか？

女2 いいんだよ。みんな勝手に大変がって、勝手に同情して、私を小

さい弱いものにする。でもそれは私じゃない。

男3 や、そんなつもりじゃ、

女2 「つもり」は見えないから意味ないよ。

男3 ごめんなさい。

女2 ところが無いのに謝らないで、余計空しいから。

男3 あ、でもほんとに、

女2 (遮って) まだ話してるの。

男3 すいません。

女2 みんなそうだった。誰だって最初は優しくそうに熱心に、私の話を聞いてくれる。でもすぐそれがフリだって分かる。私の話を聞くフリをして自分の話、自分の要求、自分の欲求。……どうせいつか離れてく。

男2 ……分かります。

女2 ?

男2 の声が女2 に届く。

女2 私は、誰にも分かってもらいたいと思ってるじゃないし、分かってもらえらると思わない。

男2 でも、分かります。

女2 私は幸福だし、私のこの人生を愛してる。

女2 その日は朝から晴れててね、ほんとにはピクニックなんてもう行けないって分かってたから夢見たの。

女2 私じゃない人のところへあの人が帰って行って、もうこの部屋には帰ってこないって、私よく分かった。分かってたから何も言えなかった。

運ばれた男1がまた生きて、部屋へ戻ってきて、同じように寝転ぶ。

女2 自分の身に何が起こってるのか、私いつでもちゃんとよく分かってる。全てがよく見えている。でもよく見えて分かっててもどうしようも出来ない今がいま、いま、いま流れていって、(流れを止めたいとは思わない。)窓辺に置いた椅子にもたれ、あなたは夕陽見えた。ほんとにおしまいなんだなあと思いつながら、目が合わない、もう合わせてくれない、前はあんなに一番よく知ってるものだったのに。

女2と男3、去る。男2はそれを見つめている。

## 報われる2

二〇五四年の男2に、二〇一八年の女1が話しかけてくる。

女1 すいません、突然ですけど浦島太郎についてどう思いますか？

男2 え？

女1 浦島太郎。

男2 ……。

女1 え、もしかして知らない、浦島……？

男2 いや知ってます、けど……

女1 よかった。

男2 え、どう？って、

女1 あなたの話を聞きながら考えてたの。浦島太郎は一体どこで引き

返したらよかったんだろう？って。

男2 引き返す？

女1 だってあまりにバッドエンドじゃない？ 亀助けてあげたのに、

おじいさんになっちゃって。

男2 あー。

女1 例えばどうだろう、そもそも亀を助けたのが間違いだったって考

えてみるのは？

男2 …いや、やっぱ亀は助けないとって、思いますけどね。

女1 そうだよな。じゃあ「お礼にあなたを竜宮城に連れて行きます」

っていう亀の誘いを断るのは？ 「結構です」って。

男2 ーでもやっぱそこは行っちゃうんじゃないかな、竜宮だし。

女1 私もそう思う。でも、そうなるともう、タイやヒラメの踊り見て、

乙姫といい感じになるしかないけど大丈夫？

男2 まあ、そうなるでしょうね。ここまでのところ、分岐点らしい分

岐点なかったし。

女1 そうなんだよ。そういうこと。

男2 え？

女1 引き返すなんて出来ないし、そもそも選ぶってこと自体、人間には無理なのかもしれないね。

男3 うん、選ぶってこと自体、人間には無理なのかもしれない。

と言いながら男3が、遠くを過ぎる。男2、それを眺める。

女1 船だよ。

二人、遠くを行く船を眺める。

男1もいつの間にか起き上がって、同じ方向を眺めている。

男2 (女1に) あなた、誰です？

女1 カーサンです。

女3が来る。

男2 え？ 母さんって、え？

女1 うん。(女3を指さして) あなたの母さんって、あれでしょ？ あれ、私だから。

女3、男1に近寄っていく。南洋踊りの音楽が聞こえてくる。

文字 男、部屋に付いた個室風呂をチェックしている。

男2 (字幕にも気付いて) いや、え？

女1 大丈夫だよ。二人は付き合うけど、別れるから。

男2と女1、女3と男1のシーンをのぞき見する。

文字 二〇一八年の続き。

女3 ねえ。

男1 うわ！

男、女がいきなり側に来るのでドギマギする。

女3 何してたの？

女は一切、気にしていない。

男1 あ、部屋ごとにお風呂が付いてるみたいで。

女3 ふーん。

男1 ……けっこう長く行ってたね。

女3 旅館の人と話してて。あと、お風呂見てきた。

男1 また入るの？

女3 ご飯食べて、考える。

男1 そうか。

女3 でも明日は入る。

男1 お風呂好きなんだね。

女3 好きだけど、大きいお風呂がね。色んな人の体があって、面白い。

男1 僕はあまり、風呂入って人のこと見てないかな。

女3 そうなんだ。

男1 どちらかというと、一人の世界を楽しむ人だから。

女3 楽しむ人なんだ(笑)

男1 あ、ホテルイカ頼めた？

女3 快くオッケーしてくれた。

男1 楽しみだなあ。

女3 ホテルイカ、好き？

男1 うーん、分からない。

女3 え、分からないの？

男1 食べたことないから。

女3 食べたことない？？

男1 ない。

女3 そうなんだ。珍しいね。

男1 そっか。

女3 ……と思ったけど、まあ住んでた場所にもよるかもね。あと、ホテルイカは身投げっていうのがあって、それはすごくきれいだよ。

男1 身投げ？

女3 イカって光るじゃん。それで浜がぶわーっと、青白いカーテンみたいになるの。

男1 いつ見られるの？

女3 産卵の時期だから、春先かな。新月の日だと遭遇しやすいらしい。

男1 へえ。

女3 ホテルイカって月の光を頼りに泳いでるんだけど、新月だと見えなくて。だから自分がどこに向かって泳いでるのか、分からなくなっちゃうんだって。それで気付いたらもうUターン出来なくて、浜に打ち上げられちゃうの。ざーん、て。

男1 あ、それで身投げ。

女3 そう。で、一晩中光ってる。だからキレイだけど、みんな死んじやうんだよね。

男1 見てみたい。

女3 オススメだよ。

男1 いつか、行ってみたいけど。

女1 with you

女3、そのニュアンスを感じる。

女3 なんかね、この近くで海難事故があったって。

男1 え？

女3 旅館の人が話してた。

男1 そうなんだ。

女3 まだ若い人、男の人がね、亡くなったって。

男1 ふうん。

女3 可哀相にね。

男1 …うん。

女3 こんな季節に、きつとさぞ寒かったらうねって、話してて。

男1 ああ。

女3 やっぱりこういうとこだと顔見知りっていうのもあるだろうしね。

男1 そうか。

女3 うん。

男1 …でも人は、死ぬよね。

女3 え？

男1 や、ごめんなさい。

女3 いや、え、

男1 …でも、だって、死ぬでしょう。海だし。海でなくても、死ぬ

わけだし。

女3 ?

男1 …あの、ちよつと予め言っておくだけでも、

女3 なに？

男1 僕わりと、食事で、食べたことないものが多いかもしれない。

女3 そうなの？ アレルギーとか？

男1 いや、そうじゃなくてただ単に、食べたことのあるものが少なかつたり、そういう、人と一緒にものを食べて美味しいなあと思つた経験が、あなたのように多くないかもしれない。…と思つて。

女3 そうなんだ(？)。

男1 うん。そう。

女3 私もそんな特別グルメとかじゃないよ。

男1 うん。…ちよつと、僕も少しお風呂、見てこようかな。

女3 あ、うん。行ってらっしゃい。

文字 男、出て行きかけて、しかしやはり戻って来て、女の近くで少しオタオタする。

女3 何？

男1 あの、

文字 男は何か、女とコミュニケーションが取りたいと思った。逃げ出さずに親密になりたいと思った。

男1 あ、それ、

男、床に置きっぱなしだった携帯電話を指さす。

女1が拾って女3に渡し、男1に手渡す。

文字 男、受け取るときにちよつと勇気を出して、握手のような感じで  
女の手を握ってみた。

男1 (パツと離して) あ。どうもどうも。

男1、出て行く。

### カーサン

女1 (男2に) ていう、ね。

男2、残された女3に近付いていって、初めて見るもののように見る。

男2 ……母さんにも、母さんじゃなかった頃があったんだ。

男2、去る。

### 散文の異常さ

時間が経っている。夜。

男1が部屋の中、後ろ向きで座って、電話を耳に当てている。  
その姿を、女1と女3は見ている。でも彼は女(たち)に気付かない。

女1 暗いなか、その人は窓に向かって座っている。

女3 くび、から肩、につづく背中……の丸みを見て素直に、おじさん  
だなあ、と思った。

女1 電話から、女の人の声がする。

女3 「何してるの？」

男1がゆっくり振り返る。女3をたしかに認識して、そしてそのまま  
元に向き直る。女3、よく分からなくて、そのまま立ってそこにいる。

女1 「散文の異常さ」

女3 ……という言葉がそのとき、頭の中で、鳴って、

電話からの声と女3の声が両方流れる。

女3、目の前の情景を言葉で描写しながら、言葉のそのリニアな線に  
のり切らずこぼれるものを周辺視野で拾いながら、喋る。

女3 おとこ、が月、のなかで、ひかりの中で、聴いていて、声を、誰  
かの、誰？ わからない。(けど、) 暗い、全体的に。黒い。こう  
いう場所に、来たことがある。家族で。こういう日本の、宿？ 宿。

それで外には海が、浜があつて、っていう。小さいころ。でも今わ  
たしには、見えない、これが一体なんなのか？ それはその、、、  
この、人が、誰か？ え、この人？ (だれだ?) なんかおじさ

ん。なんかすごいおじさんだなあって、素直に、影、の向こうから、  
窓からひかりが射していて、今日、さつき、わたしたちはそこにい  
た。歩いて。わたしは、死んだって、人がひとり、死んだって、海  
で、聞いて、驚いた。かわいそう。死ぬなんて、海で、それは当然  
そう、かわいそう、だって死ぬなんて海で、ということは当然共有  
されると、思った。そりゃあ、だって、でも、……ということが全

部同時に、というのは正しくないけど、でも伸び縮みする時間の中で、同時に、存在していて、「散文の異常さ」。散文、の異常さ。つまり人は日常、「詩」的なものをおかしいと思う。「詩」人と言われる人たちの書く「詩」は何かがおかしい。おかしい？ っ、たとえば一体なにが言いたいのか？ 意味が分からない。難解で、小難しく、厄介。だったら「部屋の中、中年の男がひとりうずくまって、電話を耳にあてている。部屋には窓があり、その外には浜が伸び、月の光が射している」って言うてくれた方がよっぽど分かる。それもうんと早く分かる。分かるんだけどそんな風に、「部屋の中、中年の男がひとりうずくまって、電話を耳にあてている。部屋には窓があり、その外には浜が伸び、月の光が射している」なんていう風に世界を見た人は、いるのか？ その散文は、分かる。きつとある程度誰にでも、意味として。でもそんな風に世界を見た人はいない。だけど詩は、少なくともそのように世界を見た人がひとりいた。他の誰もその人ではないからその言葉の意味がほんとうに分かる人はいないけど、意味じゃなくて、そのように世界を見た人がいつか確かにいた、ということがそこに、ある。というのが詩。詩は誰かの生きた息づかいだから、厄介。他人の存在は、厄介。だけど本当の本当は、誰もそんな風に世界を見た人がいない目からの言葉づかいで「この私」が、誰であっても誰か、「この人」と話すことの方がよほど、おかしいのかもしれない。

女3 暗いなか、その人は窓に向かって座っている。

女1 何してるの？

男1 ん？

男が振り返る。

男1 ああ、起こしちゃった？ ごめん。

女1 ううん。起きた。

女の声は男に届いた。これまで女の声は、実在していなかったのかもしれない。

女1、近付く。近付いたら携帯をしまうかと思ったが、男1はそのままにしている。

女1 誰？

男1 ……母親。

女1 え？

女2が通り過ぎていく。男1と女1、女3はその姿を見る。

### 第三部

#### 5

#### セミナー

スクリーンの画面に、男3が現れる。それを女2は立ち止まって見上げる。

男3 「僕は、いつもすぐ自己批判をしてしまいます。どうも、自分を批判するのが習慣というか、パターンになってしまっているようなところが、あるのです。人とぶつかったときも、頭に浮かぶのはまず自分の感情より、自分はこれは、怒っていいのかな？ 怒るべき

ところかな？ というようなことばかり。誰かに対して『理不尽だ！』と思っても、いやでもこれは、自分に何か落ち度があるのではないか？ 自分の方が悪いのに怒ったりしたら、嫌われるんじゃないか、と不安になります。

でも僕だって、腹は立ちます。いつまでもやられっぱなしの僕ではないのです。自己批判は、苦しい。僕だって、自然な感情を露呈したい。もつと、のびやかな言葉を！ 自由を！ 求めているのです」

映像が消える。と、セミナーの人々（女1、3、男1、2）が拍手をしながらかやってくる。

文字 第三部 二〇五四年

女1 何かにつけて自己批判をしてしまって、自然な感情を表に出すのが難しい。そんな風に感じることもある、という方？

一同、周りの様子を伺いながら、おずおずと手を挙げる。女2だけは、雰囲気に乗れずに身を硬くしている。

女1 そうですね。気遣いの多い日本人は、特にこういった些細な空気の読み合いで悩みがちなんですよね。

男2 （挙手）あの僕はすごく、今の、男性の方の気持ち分かるなあと思うんですけど。というのも僕も普段、タイミンを待ち過ぎててつい自分の気持ちを表現しそびれるタイプで。あとそれが、一度喋り出すとつい延々喋り過ぎちゃうか。で、あ、何が言いたかったかというと、でも今こうやってみなさんの前で発言するのもすごく、

勇気のいることのはずで、だから僕としては先ほどの方を讃えたいっていうか、そう、すごい、讃えたいって思いました。

女1 そうですね。映像の男性にもう一度、拍手を。

一同、拍手。

女1 本来みなさんは、お一人お一人がそこにいるだけでかけがえのない、価値ある存在です。それなのに、せっかくの大事な自分に対して批判してしまうのは一体なぜ？ 先日のセミナーに参加してくださった方のひとりからメールが来て、彼女の理由はこうでした。

「私は自己批判の傾向が強いことに気づき、そして自己卑下をすることで周りから『大丈夫だよ』と言われたいんだわ」

一同、うなったり、声を洩らしたりする。

女1 自己批判していれば、お友達や善意ある人たちが「そんなことないよ、大丈夫」と言ってくれる。ケアしてくれる。ここに自己批判するニーズが隠れていたのです。誰だって愛されたい・好かれない、自分が意味ある存在だと感じたいですからね。

女3 （挙手）それ、私です。「そんなことないよ」を期待して、自己批判して、でも友達から思ったようなフォローの言葉がもらえなかったりすると、あれ？ 私たちって本当に友達？ って疑心暗鬼に陥って、そうなるのもっと強く自己卑下することで、今度こそ確実なりアクションを得たいと思っちゃって。

男1 俺も、同じです。

男2 確認したくなっちゃうんですよね。不安だから。

女1 （女2に）どうですか？

女2 そうですね。この人は単に「そんなことないよ」って言うて欲しくてこういうことを言うてるんだらうなって、思ってしまうことはありますね。

一同、固まる。

女3 (挙手) あの、私、傷付きました。

男1 そうだよね、今のはちよつと……

男2 うん。

女2 え

女3 普段だったらずに飲み込んでしまったと思うんですけど、でも今は頑張つて、言いました。

男2 あ、それは俺も、頑張つたなと思いました。

男1 うんうん。

女1 良い学びがありましたね。このように、自己批判という方法はとくに破壊的で、大切なあなた自身を壊してしまうことにも繋がりがありません。

男1 じゃあどうしたらいいんですか？

女1 簡単なことです。もっと別の方法で、こころのニーズを満たせばいいんです。たとえば、周りに大丈夫だよと言ってもらいたいなら、自分で言うてみるのはどうでしょう？

一同、どよめく。

女1 言葉に出して、(鏡に向かってでもいいです)「私は大丈夫！」と言つてみる。それも、毎日、やってみる。早速やってみましょうか。

男1・2、女3、「私は大丈夫」とつぶやき出す。  
女2は、やらずに固まっている。

女1 自分のペースでかまいません。「私は大丈夫」と唱えてみてください。自分でできるならいつでも100%満たされます。人に頼ると、100%じゃないときもありますからね。

### 私は大丈夫

女1 大切な存在である、あなた自身を抱きかかえて。身体を感じて。

女2、立ち上がつて、

女2 あの、すみません先生。

女1 なんですか。

女2 このワークつて、やらなくちゃいけないでしょうか。

女1 ええ。あなたも辛かった過去から脱け出して、自由になりましょう。

女2 脱け出したいと、思つてません。

女1 分かります。人は苦しいときほど、無理矢理にでも自分を肯定し

たくなるものですからね。

女3 頭で分かつても、受け入れるのに時間がかかるときってありますよね。

女2 分かつてもらわなくていいんです。ただ静かに過ごしたいんです。

女1 ……一応朝のセミナーは、皆さんへのサービスとしてご契約内容に入つてるので、全館でやる方針なので、ごめんなさい。

女2 でもやりたくないんです。声も聞きたくないんです。

女1 どうしてですか？

女2 気持ちが悪いから。

一同、ざわめく。

女1 皆さん同じ環境にいらして、でもこれまでそういうご意見っていただいたこと、ないんですね。

女2 でもそれは言わないだけで、聞きたくないと思ってる人は他にもいるんじゃないですか。

女1 そうそう。プラスに感じていないっていう方は、たぶん他にもいらっしゃると思うんですよ。でもそういう方たちは皆さんたぶん、聞き流すとか、気にしないっていう風に対処されてると思うんですね。

一同、そうだよね、とささやきあっている。

女2 どういうことですか？

男1 だから、こうやって文句言ってるのはあなたただだってことですよ。

男2 そのことについてはどう思われますか？

女2 どうもこうも。人のことは分かりませんが。

女1 お気持ちちは分かるんですけど、やっぱりこの社会って色んな人がいて、価値観違って色々あってみんな違って、それでどうにか折り合って生きてるわけじゃないですか。

女2 そうですよ。

女3 だからあんまり「自分の感覚」とか「感受性」を大事にし過ぎち

やうと、よくないんじゃないですかね？

女2 はあ？

男2 失礼ですけど、私にはちよつとあなたの態度がワガママに見えるかな。

女2 ワガママ？

女1 みんな思ってるんですよ、それぞれの「感性」で、色々。

女2 そうですよ。

女3 でも、それを自分の言いたさで全部言っちゃうのは子供っていうか、語るべきときに、語るべき言葉を選んで、語るべきように語るのが大人じゃないかなーって、みんな思ってるんじゃないですかね。

女2 みんなって誰ですか。

女3 ええ？（笑）

男1 ……不幸が好きだと思えない。

女2 私は幸福だし、私のこの人生を愛しています。

男1 そうやってせっかく歩み寄ってくれた人まで突っぱねて。そんなんだから、いつまで経っても独りじゃないんですか？

女2 ……。

男2 や、まあまあ。僕も個人的には、そういう感覚って分かるんですけど、

女2 分かるわけじゃないじゃない。

男2 は？

女2 分かるわけじゃないじゃない、違う人間なんだから。私はあなたが何を考えてるのかちつとも分からない。

男2 いやあ…

女2 （女3）ねえ、今こうして喋ってるのは私とあなたなのに、どうしてみんなの話するんですか？

女3、隣の人に助けを求めようとする。

女2 ちょっと、今あなたに話してるんです！ 誰が聞き流してるか知らないけど、私は、私が、（スクリーンを指して）ああいうのが流れると不快なんです！

女3 でも私に言われても、ちょっとどうも出来ないんでー

女2 じゃあ誰に言ったらしいですか？

女1 いやまあちよつと落ち着いて、

女2 あなた、そうやって私を困った人扱いしますけどね、落ち着いてますよ私は。ねえそうやって、自分の体で触れたものへの回路を閉じるのが大人ですか。そうやって上手いことやって次、次って、や、上手くもないでしょ、結局そうやって自分も人も傷付けてるんだから。そうやって、そうやって、一体どこへ行くこうっていうの？

女1 **大きな声を出さないで！！！！**

女2 ！

女1、言うだけ言って去ってしまう。みんなも、え、どうする？ という感じになった後、静かに散っていく。

男1 （去り際に）やっぱりあなた、ちよつとオカシイと思いますよ。

あなたとこうやって話すと、私みたいな普通の人間は傷付くんです。他のみんなも言ってます。そうやって自分だけ正しいみたいに、普通の人は思えないんですよ。

女2、立ち尽くしている。男3が台車を押してやって来て、ペコリとお辞儀をする。

女2 ああ、あんた。おはよう。

男3 おはようございます。

女2 ……なんか、声。聞いた？

男3 （首を横に振る）

女2 どうやら向こうは、私のために「よかれ」と思ってるらしいんだ。意味はまるで分かんないけど、善良な心からそうしてるらしいんだよね。だからあだし、善良さって大嫌い。なんでなんだろう、善良なやつって大抵馬鹿だよ。ほんと、なんでかな。馬鹿は嫌いだよ、優しくないから。どうせあたしって人間に興味なんかないんだから、放っておいて欲しいのよ。

男3 乗りますか？

女2 ありがとう。

女2、台車に乗る。

女2 三十超えたら、もう少し楽になるのかな？

男3 どうですかねえ。

女2 よくそうやって言うでしょ。え、あんたいくつ？

男3 僕は、四十六歳です。

女2 あ、けっこういつてるんだね！ じゃあセンパイだ。

男3 そうですね。

女2 どう？ 楽になった？

男3 どう、ですかねえ。もういい大人ですけど、未だに自分の感情を表に出すのって難しいな、と思うことがよくありますね。

女2 まあ、あんた優しいからね。

男3 いや〜

女2 さつきもちょうどそんなこと、やってたよ。

男3 ほんとですか。

女2 うん。何だっけ、たしか、「自分で自分に『わたしは大丈夫』と

言ってみたら？」

男3 あーなるほど。

女2 でも寂しいから、向かい合ってやろうか。

男3 分かりました。

女2、台車の上で向きを変える。

二人 「わたしは大丈夫、わたしは大丈夫、わたしは大丈夫、……」

女2、目をつぶって、自分を抱きかかえるようにして、唱え続ける。

男3は、途中から黙って、台車を押し続ける。

女2 「わたしは大丈夫、わたしは大丈夫、わたしは大丈夫……」

男2 大丈夫ですか？

いつからいたのだろう、男2がやって来ていた。

男3、台車を押すのを止めて、そこから離れる。

男3 大丈夫大丈夫。いつものことだから。

男2 いやそれ、けっこうキツくないすか？

男3 別に、そういう世界に生きてるんだなと思えば。

男2 うーん。

女2 でも時々ね、世界に私ひとりしかないんじゃないかと思うときがあるよ。

男2 え？

女2 呼びかけても呼びかけても誰の返事も聞こえなくて、だんだん自分の声、を出してるこの身体、ごと丸ごと存在しないんじゃないのかなと、思うときが、ある。時々ね。

女2 あれ？ わたしの声、聞こえる？

女2 おーい。

女2 おーい、もしもーし。

女2 もしもーし。私の声、聞こえてる？

女2 もしもーし。お願いだから、誰か何か、応えてくれーし。

女2 ……。

女2 「わたしは大丈夫、わたしは大丈夫、わたしは大丈夫、……」

6

羊羹

二〇一八年。

女3 誰？

男1 ……母親。ごめんね、こんな時間に。

女3 ううん、それは大丈夫だけど。

男1 父親が死んで以来、気落ちしちやっつて。それでそこから電話がかかってくる。

男1、電話をポイっと投げ捨てる。

女3 ちよつと！

男1 いいのいいの。どうせ自分の言いたいことだけ言つて、こつちの言うことは何にも聞いてないから。

女1 聞こえてるし、意味もちゃんと分かつてる。

女2 そうだよ、私はちゃんと分かつてる。

女3、女2を見る。

女2 おーい。(手を振る)

女1、男2・3、手を振り返す。女3はそれを見る。

女3 時間が、かかるのかもしれないね。

男1 時間がかかるのは分かつてる。分かつてるからこうしてずっと、僕の人生かけて支えてきたのに。

女1 暗がりのなか、男は羊羹を食べている。

女3 え？

男1、羊羹をかじる。

女3 なんで？

男1 え？ ああ、お腹空いちやっつて。

女3 えーでも羊羹で。今何時かな？

男1 食べる？ かじつちやつたけど。

女3 や、いい。

男1 そう。

女3 こんな暗い中で。

男1 だって電気点けたら、

女3 そうだけど…

女1 変なやつだなー。

女3 すごいマイペースだよね。

男1 そうかな。そう思わないけど。

女3 うん。思つてたらそうじゃないと思う。

男1 そうか。

電話から、歌が聞こえる。「翳りゆく部屋」

女3 歌いだした。

女、少し歌を聴く。男は聞き流している。

女、笑い出す。

男1 え、何？

女3 (笑いながら) ううん、いやこの状況なんだろうなーと思つて。マ

ツチングアプリで会って旅行来て、一緒にお母さんの歌聴いてるつて、

男1 あ、おかしいか。

女3 おかしいよ！……あーあ、おもしろい。

男1 ……ほんただね。

女1 けっこう上手いね。

男1 まあ、これしか歌わないから。

女3 そうなの？ なんで？

男1 テーマソングだって。

女3 あ、お母さんの？

男1 や、父の。

女3 え？ でもこれ、別れの曲でしょ。

男1 いなかったから、父親。

女3 あれ？ でもさつき、亡くなったって。

男1 僕が二歳のときに出ていった。で、四年前に死んだ。

女3 そうなんだ。

男1 だから、よく分からない。母が何をそんなに泣くのか。僕にとっ

ては初めから、存在しない人だから。

女3 ふーん。

女1 すごく、好きだったんだね。

男1 どうか。執着じゃない。

女1 それも込みですごいな。

男1 ……。

声は途切れない。

女3 お風呂、入ろっかな。

男1 今から？

女3 うん、なんかいい気分。あるんだよね、個室風呂？

男1 え

女3 どこ？

男1 あ、えつと……

男1、うろんな仕草で漠然と、部屋の中に個室風呂を出現させる。すごくいい加減な風呂。女1が、それをサポートする。

女3 へーこれが個室風呂かー。小さいなー。

女3、入る。

男1、もじもじしている。

女1 ? 何してんの？

男1 え、あ、はい。

と言って、服を全部脱いで風呂に入ってくる。

女3 え！ 一緒に入んの！？

男1 え？

女3 ……。

男1 ……。

女3 ……。

男1 ……。

男1、引き返そうとする。

女3 あ、いやいいよ、入りなよ！  
男1 ……。

二人、小さいお風呂にギッチギチに入る。

女3 せま！

男1 ……すいません。

女3 いいけど。

男1 そういうもんかと思つてて。

女3 なんで！？

男1 ……。

女3 ……いや、そういうものつて人たちも、いるのかもしれないけど  
……。

男1 ……うん。

男1 ……服、脱がないの？

女3 え、脱いだけど。

男1 着てるよ。

女3 ……。

女3、出て、服を脱ぐ。脱いでいる間、女1が話す。

女1 さっき、アプリを久しぶりに開いたらさ、

男1 アプリ？

女1 うん、私たちが会ったやつ。

男1 え！ うん、それで？

女1 なんかいっぱい「いいね」が来てた。

男1 そりゃそうだよ！

女3 ねえ、なんで私に「いいね」したの？

男1 それは、素敵だなあと思ったから。

女3 何が？

男1 ……笑顔とか。

女3 顔？

男1 顔…もまあ好きだけど、プロフィールの文章とかも、感じがいい  
なあと思つたし、

女1 あれ大体嘘だよ。

男1 えー

女1 でも会えば分かるじゃん。

男1 そうだよ。どうせ会えば分かっちゃうのになんで

女1 と思つたけど、全然だったよ。

男1 え？

女1 会つてもさ、全然分かんないの。私が何を考えてるかとか。

男1 ……。

女3、入る。

男1、挙動不審になっている。

女3 どうしたの？

男1 いやまさか、僕の人生にこんなことがあると思わなくて。ちよつ  
とどうしたらいいか分からない。

女3 私も。

男1 そうは見えないけど。

女3 大人になって男の人とお風呂って、初めて入った。

女3 あなたと会う前に付き合ってた人はね、奥さんと子どもがいたの。  
男1 え……………不倫、してたの？

女3 六年間一緒にいたけど、たぶん一回も、わたしが何考えてるか分かんなかったと思う。

男1 ……それで、寂しくなかったの？

女3 そういうもんだと思ってたから。

男1 ……。

女3 言葉が伝わらないのも、こころが通じないのも、誰といってもそうだったから。

女1 人のこころが分からない。分からないことが私にはデフォルトだけれど、友達も恋人も家族も、いつもみんな当然分かるだろうという分かり合えなさで私に対して親身で、でもこの人は、私と一緒にアウエーの風、ビョービョー感じてくれるかなあ。

女3 ……先上がるね。

男1 僕はあまり色々わからないけど、

女3 うん？

男1 でも実際に会って、やっぱりかわいい笑顔の人だなあと思ったよ。

女3 ……。

男1 まあすこし、…だいぶ、思ってたのと違ってたけど。

女3 ……ありがと。

女3、出る。

男1 なんで僕と旅行に来てくれたの？

女3 え？

男1 僕なんか、条件悪いじゃない。

女1 条件？

女3 嫌じゃなかったから。

男1 え？

女3 あなたといるの、嫌じゃなかったから。

男1 ……。

女1 ねえ、条件って？

男1 毛深いし、色白だし、おじさんだし。

女1 まだそんなおじさんじゃないよ。

男1 ……あとはまあ、母もいるし。

女1 ふーん。

男1、女3の気配がないので出てみると、いない。脱ぎ捨てられた服だけが落ちている

女1 その条件はさ、それはずっと変わらないの？

男1 ……どういうこと？

女1 その条件は、なんていうかもう永遠にあなたに「込み」なの？ それ込みであなたなの？

男1 ……。

女1 家族なんて、捨ててもいいんだよ。

男1 ……僕に、そうして欲しいって言うてるの？

女1 そうして欲しいって言ったらそうするの？

男1 分からない。

女1 自分のことなの？

男1 そうじゃなくて、あなたが何を求めてるのが分からないって  
女1 わたしのことなんかどうでもいいんだよ。

男1 え？

女1 あなたはどうしたいの？

男1 ……。

### 食卓

女2が来る。一九七八年の、男1の記憶の中の母親。

彼女は自分の食事だけ用意して、食べる。その姿を男1は見つめる。

女2 ……水。

男1、水を持ってきて、渡す。女2、飲み干すと出て行こうとする。

男1 どこ行くの？

女2 ……。

女2、そのまま行こうとする。

男1 いつ帰ってくる？

女2 ……すぐ戻るから。

男1 嘘だよ。前にもそう言って、ずっと帰ってこなかった。

女2 ほんとにすぐ、戻るから。

男1 ……。

女2、去る。男1、取り残される。

### 歯の窪み

女1 その日はこんな夢を見た。歯が痛くて痛くて目が覚めて、そこに  
ある穴を、舌で触って確かめる。穴は窪地になっていて、そこに小  
さな子どもがいる。子どもはすり鉢型の底のところではやがみこん  
で、一心になにか、見ている。

男1 蟻だよ。

女1 え？

男1 蟻を見てるの。

女1 どこ？

男1 そこ。

女1 見えない。

男1 そだよ。

女1 ここからは見えない。…面白いですか？

男1 面白い。ずっと見ても飽きない。

女1 ふーん。

男1 幼稚園の卒業文集で「将来なりたいたいもの」を書くコーナーがあつてね、

女1 うん。

男1 僕、そこに「石」って書いた。

女1 石？

男1 そしたら一日ずっと蟻見てられるじゃんね。

女1 ああ、たしかにね。

男1 でも心配されたよね。「石になりたい」って、うちの子は大丈夫か？って。

女1 へえ。

男1 それでますます、ああ石になりたいなあと思った。

女1 へえ

男1 うん。しみじみ思った。

女1 なんぞ？

男1 喋りたくない。

女1 あ、ごめん。

男1 ちがうよ。そう思ったってこと。

女1 そっか。

男1 僕が何言ってもほんとには聞いてないから、もう喋りたくない。この人に何言っても無駄だ、と思った。

女1 お母さん？

男1 そ。

女1 それは、なんだろう、「なりたい」って言葉の「なる」じゃなくて「たい」に着目してたってこと？

男1 どういうこと？

女1 だから、「石に本当になれるかっていったらならないことは勿論踏まえた上で、でも「(なり)たさ」の「たさ」的には石がベストだった」ってことなのかな。

男1 ちょっと何言ってるか分からない。

女1 ……そっか。

男1 でもいいよ。昔のことだし。母さん色々大変だったからね、しようがない。

女1 そっか。

男1 まあ今も大変だけど。

女1 そうなんだ。

男1 でも僕はしょうがないけど、ほら(あなたは)ね。

女1 え？

男1 いいよ、付き合わなくて。こんな大変親子に。

女1 いやいやそんなこと言ってるじゃないじゃん。

男1 それに僕おじさんだし。

女1 何言ってるの、子どもじゃん。

男1 まあいくつになっても、男は子どもだから。

女1 そういうこと言うやつ、嫌いだよ。

男1 ほら、嫌いじゃん。

女1 ……いや、ちがうでしょ。あーでも「いくつになっても少年の心を忘れない」とか言ってるそれが通ると思ってるオッサンとか、ほんと嫌いだよ。

男1 そうは思っていないよ。

女1 そうだよ。

男1 うん。

男1 ただなんか、子どものままおじさんになってしまった感は、否めない。

女1 そっか。

男1 や、これは、開き直ってるわけじゃないんだけどね。

女1 うん。

男1 母親に、何が起きているんだらうって、勉強したんだよ。

女1 ふーん。

男1 本読んでね。

女1 何が起こったの？

男1 ある日突然起きなくなったたりするんだよね。

女1 へえ

男1 あ、でもたまにね。

女1 うん。

男1 昨日まで普通だったんだけど、突然朝起きたら母さんが起きれないって言うって、ごはんが全然なかったりするわけ。

女1 それは、なんで？

男1 分かんない。分かんないから本読んで、それでちよつとは「あーそつか、僕の母さんにはこういうことが起こってるっぽいな」とか知ったんだけど、でもそれ意味ないんだ。

女1 え？

男1 動けないっていうのは本当にただそのままの意味で、動けないときは本当に動けないんだよ。その内側で何が起こってとか、なんで？とか言ったって、でも彼女は動けない。そういうことが、人間にはある。

女1 ……。

男1 父親も、いないってどういう感じ？とか聞かれたことあるけど、でも現実には、実体としてそこにいない、存在しないってだけで、ただその通り「ない」んだよね。

女1 ……うん。

男1 って思ってたけど、でも母さんには違ったみたい。

女1 ……。

男1 父親が死んでも、何も感じなかった。でも母さんは毎日、電話してくる。果てしなくしゃべりつづける。そこにまっくらな、本当に入らな穴があいてるような気がする。ときどきざあざあど雑音が入って、声が途切れる。それでも母は喋りつづける。あるいはこれは、僕の方の不具合で、母の携帯はなんともないのかもしれない。彼女はしゃべりつづける。僕が聴き取れなくてもかまわない。お腹が空く。ざあざあ、ざあざあ。その雑音が、穴の音だ。母がしゃべればしゃべるだけ、ひとりだひとりだひとりだという思いが、そこに吸い込まれていってるのだ。長い時間がかかる。でもふと、本当

は穴は僕に空いてるのかもしれないと思う。だからこんなにお腹が空く。食べても食べても満たされない。ひとりだひとりだひとりだという母の思いに僕は、自分の人生が空しくなる。僕はずっとそこにいたはずだけど、いなかったように感じる。

7

### お葬式

南洋踊りの音楽に合わせて、女2の葬送行列が通っていく。女2を先頭に、台車を担いだ男2・3が後に続く。それを男1は眺めている。

男2 終わってしまった関係は、どこに行くのかな。

男2 会えなくなってしまったあの人は、今も元気でいるんだろうか。

男2 今日たまたま思い出して、でもきつと明日は忘れている。

去っていく葬列の人々に少し遅れて、女3がやってくる。

### 子ども連れ出してやる

女3 「あたしは、幼児と遊ぶのは嫌いなのである。こっちのペースで遊べないし、ことばさえつうじない。生まれたときから知ってる子どもたちではあるが、親抜きでいっしょに遊んだことは一度もない。しかし、しのごのいつてる場合ではない。子どもの危機だ。それで、二人を連れだして公園に遊んだ。アイスも食べた。ティーンエイジャーのたまり場であるデイリークイン、そのチョコがけソフト

クリームという未知の世界を、幼稚園児に知らしめた。二人はごきげんであった。明日も来てやる、あさつても来てやる、あなたたちのおかあさんが帰ってくるまで、毎日必ず遊んでやる、この町のすべての公園にあんたたちを連れてつてやる、とあたしは二人に約束した」つていうさ、

男1 え？

女3 今、そういう感じ。今のはわたしの好きな詩人がね、友人の夫が死にそう、子どもの世話を、それどころじゃなくて放り出して夫の最期を看取ったときに、その双子の子どもを遊びに連れ出してやる、つていうエッセイなんだけど、わたしもさ、今そういう感じ。

男1 ……。

女3 あなたは双子じゃなくて一人だけでも、そしてもう子どもじゃないくて大人だけ、さ。

男1 ……ありがとう。

女3 どういたしまして。

男1 あ、ガム食べる？

女3 え？ 今？

男1 あ、いらない？

女3 いや、いるけど。あなたのタイミングが、ちょっとまだ分からない(笑)。

男1 や、歯に穴が空いてるなら、と思つて。

女3 ……。

女1 わたしがわたしの歯の窪みの縁で子どもと会っているときに、この人はわたしに、キシリトールを食べさせることを考えていた。

本作品の「子どもを連れ出してやる」の一部は、伊藤比呂美『読み解き「般若心経」』（朝日新聞出版、二〇一〇年）pp.120-121から引用させていただきました。

また「散文の異常さ」は、荒川洋治『詩とことば』（岩波現代文庫、二〇一二年）「散文は『異常な』ものである」に大きく影響を受けて執筆しました。ここに御礼申し上げます。